

会津八一有恒学舎時代の記録

木村秋雨資料から

金子 善八郎

(一)

会津八一の有恒学舎学級担任の記録表紙「明治廿九年度尋常科一年級乙組記録」(以下「記録」)和紙、縦罫、袋とじ十八枚、三十五頁、墨書を、糸魚川歴史民俗資料館が所蔵している。

「記録」は木村秋雨収集資料の一つで、昭和五十七年(一九八二)糸魚川市へ寄贈されたもので、平成四年(一九九二)「木村秋雨翁収集資料目録」に記載されている。

木村秋雨は本名淑澄、明治三十九年(一九〇六)、旧中頸城郡三郷村に生まれ、昭和六十三年(一九八八)十月没した。有恒学舎を中退し、雲洞庵で得度して孝禅といい、主として俳諧の資料を収集、上越市文化財保護審議委員を務めた。

また、会津八一が旧北蒲原郡中条町へ疎開したとき、相馬御風の紹介で八一の許へ出入りするようになった。

(二)

会津八一は、明治三十九年早稲田大学を卒業し、当時の中頸城郡板倉村大字針、舎主増村度次・朴斎の有恒学舎へ英語教師として赴任する。恩師坪内逍遙推薦の雑誌「文章世界」記者の職を断つての「都落ち」であった。

八一は、赴任と同時に「授業多きには稍々閉口の気味にて候」(郷土作家叢書四『会津八一』・昭和54・野島出版)などといったながら、直ちに一年乙組の担任になったようである。

「記録」は、この担任学級乙組の明治四十年正月「十七日」から、「明治四十年度」第一学期(七月十八日まで)、第二学期(十一月二十三日まで)、第三学期(二月一日まで)の記録である。

八一と同期同郷の友人であった相馬御風は、大学卒業と同時に「早稲田文学」の編集部・早稲田文学社に入り、かつての級友との箱根温泉行きを八一に知らせた。その八一の返信に「御清遊をうらやみ候 諸兄へよろしく御伝へ被下度候 御風兄 梧下」とある。

当時の八一は、語るに人のない田舎教師の孤独を次のように詠んでいる。

つきみずの 池に月なし

板倉の村に友なし 長きなが夜を

他方、「八朔郎」といって句作に励み、針村は小林一茶の郷里柏原に近い

こともあって一茶研究をはじめ、一茶の「六番日記」を発見する。四年後上京した時、御風によって「俳人一茶の生涯」が「早稲田文学」(明治44・1)に発表された。

(三)

「記録」はすでに『会津八一伝』(吉池進・昭和38・会津八一先生伝刊行会)、『会津八一全集第十二巻』(昭和59・中央公論社)に掲載されている。当時、

木村秋雨が所蔵していた「原本」を、吉池進が筆写し、それを底本としたものである。

しかし、この「原本」と『会津八一全集』には、かなりの異同がある。

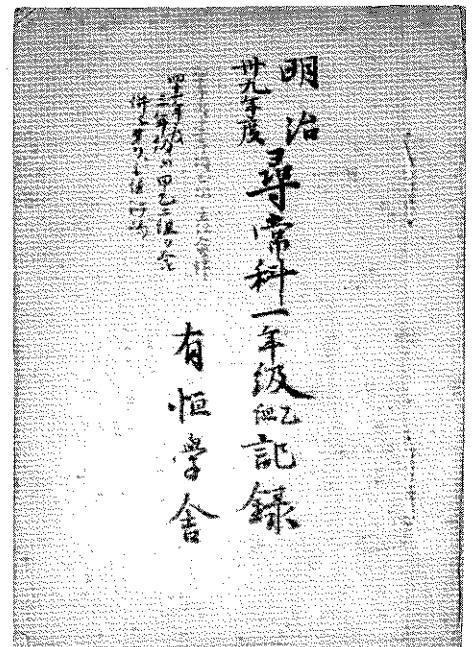
まず誤記、脱落。第一学期の組平均点「六六・一七」が「六六・七」に、「散会す」が、「散会せり」に、「弘むるよし」が、「弘むよし」に、「此の大文章」が、「此の文章」に、「談話」が「講話」に、「三年級」が「二年級」に、「十一月二十三日」が、「十一月二十三日」に、十三頁「二年級乙組」が「二年級乙組」になっている。そして六頁の「与へたり」の次に「要に曰く国土は大なる書斎なり」が脱落している。

その他、送りがない、読み易いようにか、「催す」を「催はす」に、「立て」を「立ちて」などと直されている。なお、原文には句読点は一切ない。

重要なのは、文末の八一の署名四個所中三個所に「八一」または「会津」の印、四十年一学期末、二学期末に「閱了」増嶋の朱書と押印が落ちていることである。「記録」は学期ごとに舎主に提出し、検閲を受けていたものである。

(四)

「記録」の記述によって当時の八一の教育観、人生観を知ることができる。記述の主なもの、英和辞書紛失・



無断借用事件、担任学級の成績、落第生、修学旅行、暑中休暇中の心得、級長選挙、生徒遊蕩賭博事件、保証人(父親)の子どもに対する態度、などである。

担任の乙組の平均点が甲組と比較して低いことを、「依然として大に遜色あり。」と嘆いている。

落第生の指導には気を配り「叱責するのみにては感化の功をあげる事難かるべし」と述べ、「彼等の自恃、自覚、自尊の念を恢復せしめる」方途を求めている。

また、級長選挙では、落選したある生徒について、「自ら信じ自ら恃むこと深きに過ぎて強いて群俗より遠ざからんとするといふが如き欠点」といい「為めに一般の人の望を得るを得ざりし結果」と分析批判している。この記述からは、後年の孤高な八一の風姿は想像もできない。

(本稿は、会津八一記念館・喜嶋学芸員のご教示をいただいている。)